

妙高高原南小

NO. 3 平成23年6月21日

5月の運動会は、晴天に恵まれ大成功に終わりました。また、先週末には妙高市親善ミニバスケットボール大会が行われました。女子は、5年ぶりの準優勝を飾りました。男子は、残念な結果でしたが、最後まで諦めず必死にボールを追う姿は、感動を与えてくれました。この悔しさは、陸上で晴らしてくれることと期待しています。

夢あればこそ！左手一本のシュート

6月の初めの頃だったでしょうか。帰宅すると二男が居間でテレビを見ていました。何気なく夕食を食べながら一緒に見ていましたが、どんどんテレビに引き込まれ、最後は目から大粒の涙を流していました。大まかな内容を紹介します。

中学生で県下No1のバスケット選手・田中正幸くんは、インターハイ出場を夢見て山梨県の強豪校「日川高校」への入学が決定します。しかし、入学式の3日前、遠征先で脳動静脈奇形による脳出血で倒れしまいます。11日間意識を失い、奇跡的に一命は取り止めたものの右半身の自由と言葉を失いました。当然、医師からは「バスケットは無理」と宣告を受けます。しかし、正幸くんは絶望の底で夢を心に誓い「再び試合のコートに立つ」と決意します。高校を1年間休学しリハビリに専念。自分の足で立つところまで回復、その後言葉も何とか喋れるまでになり、復学して、今度はリハビリを続けながら、部活も再開します。

中学校では、エースだった正幸くんが、チームのためにモップがけや球拾い、後輩への指導と1日も休まず、不自由な右半身を精一杯動かしながら、自分のできることを一生懸命やるのです。

そして、高校3年の最後の大会になるかもしれないインターハイ予選を迎える前に、顧問の先生から部員に提案がありました。「正幸を試合に出したい。」部員の中には、だれ一人反対するものはいませんでした。その日から、顧問の先生が考えた「正幸フォーメーション」の練習が始まります。右手が使えない、速く走れない、ジャンプができない正幸くんのために、パスは手渡しで仲間が壁となりシュートを打たせる5人の動きです。インターハイ出場を夢見る部員全員が彼一人の1本のシュートのために時間を割いて練習するのです。それに答えるべく、正幸くんも利き腕でない左手のシュート練習を毎日行いました。

いよいよ試合当日、残り3分32秒、悲願の試合に出場コールがされ、正幸フォーメーションにより左手一本、1回だけのシュートは、見事にきまります。泣き崩れるベンチ、チームメイト、相手チームの応援席までもが割れんばかりの拍手を送りました。

その後、日川高校は、快進撃を続けベスト4止まりの前評判を覆し、見事優勝、インターハイの切符をつかみました。

最後に本人の言葉が流れました。「あの出来事は、僕が周りの人に支えられて生かされていることを忘れないために、神様が僕にくれた贈り物だって思っています。」

こんなドラマか映画のような話がお話です。絶望の底で見つけた夢は、いろいろな逆境を乗り越えさせ奇跡さえ起こさせてしまいました。私も含めて大人は、つい現実的な物事を子どもに言ってしまいがちですが、子どもには夢をもたせることが、とても大切なのだと実感させられました。私たち教師や親は、子どもに夢を見させることができる、夢を追いかけることを応援することができる存在にならなければいけないのだと痛感させられました。